

雑感

二十一期生 伊藤 幹夫

僕達の代はみな卓球がへただった。これ以外いっただい何を
書けというのか。井の頭のランニングもきちんと走った。ト
レーニングもいやいやながらもきちんとやった。練習もやっ
た。練習前後のミーティングはよくやった（否しやべったと
いうべきか）しかし、結局のところ試合に出ては、負ける
という繰り返しだった。それ以外いっただい何を書けというの
か。今ある意味での「冷静」な目で見たとき部活動は、体の
よい時間つぶしに過ぎなかったような気もする。その「腐れ
縁」が何故今の今まで続くのか。わかるようでわからない。
しかし、全く別の感情が僕の頭にある。部が好きだとい
うことだ。僕個人としては、中学時代に比べれば卓球に対する
熱はずっと冷たいものだった。しかし、「みんな」に会える
から部に出たのだ。誰もがそう思ったに違いない。そう思
いたい。確かに、部なんてものは一つの「好み」に関しての
人の集合にすぎない。故に部員相互で趣味が完全に一致した
わけではない。けれども、僕達は互いによく会ってはだべ
った。部として活動しない三年の時に、それは顕著になった。

それでよかったと思うのだ。理由などない。あれが時間つぶ
しであつてもだ。

書きながらNBCの発表のことを思い出してしまった。適
当に一位、二位を決め、たれ幕を作り、朝礼のとき爆竹を鳴
らし、たれ幕をたらし、そして逃げた。終わったあと、赤青
両鬼の所に謝りに行った（いっただい何を？）青鬼曰く「また
お前か！（筆者を指す）」おもしろかった。それだけだ。他に
印象に残ることなどない。

先輩も、後輩も、そして僕達も、いっただい何人が部なんて
ものを真剣に考えたろう。皆結局時間つぶしではなかったの
か。（何て僕は部をシリアスに考えてしまうのだろう。）無心に
白球を追う姿を人は美しいと思うかもしれない。でも何か球
を追う間、何かやり残した気がするのだ。そうも考えない人
は、そのこと自体が部活動が時間つぶしであることをして
いる。ハハハハ、赤面赤面。

